

たまいたま 川柳



夏瀬の尾

平成30年(2018年)
7月号 (No.704)

日川協加盟

巻頭言

ヨの神とシノミ

願法みつる

神社などに鎮座している神様は、天照大神など古事記に登場する朝廷の神々であり、固有名詞をもっており、これと融合しながら民衆の神々も多かった。即ち森羅万象を示す具象・抽象の神々である。この神々は自然の中に在って、ナニカに宿って現われてくる。岩や山、川や森、海や波、風や雨そして太陽や月、そして様々な動物や植物など、畏敬の対象になるものであろう。

その中で最も身近で偉大なる崇拜物といえば、山の神を筆頭に自然神ではないだろうか。文書によれば、「山の神」とは、農業の民と山の民とではその見方が違うらしい。農の民にとっては、山から水をもたらす田に降りて田の神となるという。一方、山の民にとっては、山の獲物をもたらす、山の中の仕事や生活を守ってくれることが期待されている神である。

現代の「山の神」が、頭の上がなくなった自分の妻を称するというのも面白い。神話の時代から女尊男卑であったと考えれば、自然回帰現象でもあろうか。また、女性パワーの現実を見せつけられると、男性の本能が萎縮して行くようだ。川柳界の現状は如何に・・・と見渡してしまう。そこには古川柳以来の世界がある。歴史は繰り返すのではなく、回帰したのだと認めざるを得ない。

日日是好

願法みつる

人生の火除け金除け女除け
百坪の千切れ雲さえ天のもの
流れ星懸けた思いに無い迷い
曼荼羅が天井に浮き鈴も鳴り
貧すれどまだ踏んばっているパトス